

作物別技術交流集会報告

かんきつ

日本人が食べる果物の約40%を占め、9月後半の極早生温州にはじまり翌7月のバレンシアオレンジまで9ヶ月あまり食されているかんきつ。らでいっしゅぼーやが昨年取り扱ったかんきつは14種類にもなります。今年のかんきつ集会は「施肥管理」がテーマ。8月24～25日和歌山県川辺町で開催されました。静岡、愛媛、熊本、和歌山から集まった16グループ47名は、どんな成果を得るのでしょうか……。

Report

今回の集会、事前アンケートでいちばん返答が多かった課題は「病害虫抑制」と「隔年結果防止」。どういう防除をしているのか、なにか禁止されていない良い薬剤はないか、みなさんの気になるところですが、講師にお招きしている小祝政明さんは「どの薬を使おうかと考える前に、ぜひ樹勢をよくすることを考えて欲しい。樹が健康になれば抵抗力が増し病気はかなり防げるようになります」と話します。

■苦土欠注意!

有機に近い栽培で見落とされがちなのが「苦土」。事前の土壌分析では参加者の8割の圃場で苦土欠とのことでした。この苦土欠、小祝さんによると症状としては樹木の内側と外側の葉の厚みが極端に違う、実が日焼けを起こす、下の葉が白くすすみ、上の葉につやがある、花芽が出来なくなってしまうなど。一方で苦土が十分に施されると、葉色が違ってくる→光合成を行う→実ののりが早く糖度も上がる→葉につやが出る→油脂分が出来る、となり油脂分=ワックス効果で病気の侵入を防ぐようになります。

今回見学した紀の芽の会の岩本隆良さんと原修一さんの圃場でも春先に苦土欠との診断を受け、苦土を撒布。現在3ヶ月ほどで葉色に改善が見られています。



葉の色やツヤの状態です苦土欠が分かる。これはどうかな……

■施肥はまんべんなく

また小祝さんからは施肥ムラのご指摘。だいたいの方が最初は気前よく、途中は少なめで、最後はどかん、とあげてしまう。これが肥料撒布の気づかぬクセ。岩本さんの圃場も「ここに車を止めて撒きはじめたことが読み取れます。ほら、樹のこちら側だけ樹勢がいいでしょう?」と小祝さん。ということはその逆側、施肥の不十分な側は病気が侵入しやすい。施肥は樹木の360°まんべんなくがポイントです。



この木のこちら側が裏側に比べて葉の勢いがいい。片側に多く肥料を撒いていることが分かるんです。(小祝さん)

■秋肥は収穫中でも大丈夫

実をたくさんつけた樹があるならば、その土壌は栄養がすっからかんだと考え、地温が18℃以下になる前に秋肥を施します。根が休眠する前に栄養を吸っておいてもらい、来春、根が目覚め細胞分裂をはじめるときには燃料満タン状態にしておくこと。

成分内容は窒素をより吸ってもらうようにアミノ酸態窒素がよく、撒布の時期は有機肥料は化成に比べどれくらい効果の発現が遅くなるのかを念頭に9月中旬頃、収穫中からでもよいとのことでした。

■数値を理解し把握する

今回の土壌分析でみなさん少なかったのが鉄とマンガン。これが不足すると新葉が出たときに白い葉になってしまうの



「微量元素の働き」聞けばきくほどどれも大切。でも過剰はまた毒なり。数値での把握が必須です。

で秋肥で施します。どちらも最低10ppmは必要です。そしてミネラルが吸われるのによりペーパーは55～65……。

小祝さんは「今回の勉強会のように今後は数値を理解し把握していくことが中心になります」と宣言。みなさんの栽培方法を次代へつなげるには、カンではなく数値で表せることが大事なのですね。

■自分の圃場は何か合うのか

では、各ミネラルの標準値はいくらなのか?生産者さんの最も知りたいところ。小祝さんは、砂地と粘土質の土壌でもまったく数値は変わってきますよ、と前置きをしながらもだいたいの目安を話されました。そして「人の話を鵜呑みにせず、自分の圃場は何か合うのかを常に考えてください」「1/10の面積で1、2年試しながら、徐々に面積を広げていってください」と締めくくってくださいました。

……風土が違えば、出る虫や病気もさまざま。熊本では深刻なテッポウムシも、和歌山では全くないという話もありました。果樹は効果があらわれるのが2、3年先と根気のいるものですが、まず試して何が自分のところに合っているのか、それを見極めることが大切。そのための一助が土壌分析であり、数値での把握なのですね。(事務局・島田)